特集「ソフトウェア工学」の編集にあたって

野田 夏子[1,a)]

ソフトウェア工学は総合的かつ実践的な学問であり技術体系でもある．そこでは，単純に実践を目指せば問題が解決するということは望めず，理論研究に基づくソフトウェアの基本原則と過去のシステム事例研究に基づく実証経験とを突き合わせ，産学が連携して総合的に真のソフトウェア工学を目指していくという根気強いアプローチが求められている．情報処理学会ソフトウェア工学研究会では，こうしたソフトウェア工学分野のよりいっそうの活性化のために，シンポジウム，ワークショップ，研究発表会等，研究者，実務者が集い，理論研究の成果並びに具体的な実践事例を発表しともに議論するための様々な場を提供している．本特集号もそのような研究会の取り組みの一貫として企画した．

本特集号では，ソフトウェア工学に関連した研究開発全般について，最新の研究成果や具体的な実践事例からの知見まで，幅広く特集することを基本的な編集方針とした．ソフトウェア工学においては，理論的な研究の成果の報告だけでなく，そのような成果を具体的にどのようなソフトウェアの開発にどのように適用したかの適用例，いわば技術適用の「臨床事例」の報告が今後の研究の発展に非常に有効であると考えられる．そのため，実践事例とそこからの知見についても取り上げることを企図した．従来，このような論文（いわゆる経験論文）を積極的に募集することはそれほどなかったこと，またその結果，経験論文の作成に慣れている人が少ないこと等から，経験論文の投稿は結果としてはそれほど多くはなかった．しかし，数は少ないながら興味深い事例の報告が寄せられた．

また，より良い論文をより早く論文誌に掲載すべく，本特集号では通常の論文投稿方法だけではなく，2011 年 9 月に開催されたソフトウェア工学研究会主催「ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2011（SES2011）」に投稿されたシンポジウム投稿論文を，著者の希望があればそのまま並行して投稿論文として扱うことも可能とした．ソフトウェアエンジニアリングシンポジウムは，ソフトウェア工学の多様な技術分野に対して，研究者・技術者・実務者間で理論や実証経験を共有し議論する場として，2006 年から毎年開催されているものである．例年，シンポジウムを受けて特集号が企画されてきたが，今年はシンポジウムとより強い連携を図り，より早く優れた成果を読者と共有することを企図した．

本特集号には，特集号への単独投稿，上述のシンポジウムとの同時投稿を合わせて，総計 44 編の投稿があり，2 回の編集委員会での真摯な議論検討を経て，最終的に 18 編が採録された．編集委員会では，読者にとって価値のある優れた論文を採録すべく，問題設定は読者にとっても有用なものか，その解決方法は妥当で納得性高く述べられているか，世界的な研究潮流に照らしたときにどのような位置付けと捉えられるか等，活発に議論し採否を検討した．また，潜在的な価値が認められるものに対して，採録条件をきめ細かく提示し，照会を行った．採録条件への対応により，より質の上がった論文も多数見られた．この結果，当初のねらい通り，ソフトウェア工学の理論から実践まで幅広く質の高い論文を多数集めることができたと考える．

最後に，本特集号の編集にあたって手助けをいただいた編集委員及び学会関係者の方々と，投稿していただいたすべての会員の皆様に深く感謝する．

「ソフトウェア工学」特集号編集委員会

- 編集長
  野田 夏子（NEC）
- 編集委員（五十音順）
  阿萬裕久（愛媛大学），荒木啓二郎（九州大学），鵜林尚靖（九州大学），菊地奈穂美（沖電気工業），岸知二（早稲田大学），小林隆志（名古屋大学），権藤克彦（東京工業大学），佐伯元司（東京工業大学），坂田祐司（NTT データ），紫合治（東京電機大学），白銀純子（東京女子大学），中谷多哉子（筑波大学），野中誠（東洋大学），松浦佐江子（芝浦工業大学），丸山勝久（立命館大学），満田成紀（和歌山大学），鷲崎弘宜（早稲田大学）

1 NEC
NEC Corporation, Kawasaki, Kanagawa 211–8666, Japan
a) n-noda@cw.jp.nec.com

© 2012 Information Processing Society of Japan